ステロイド局注で症状が軽快した顔面肉芽腫の１例

大藤　聡[1)]　　丸山　理留敬[2)]

キーワード：顔面肉芽腫，ステロイド局注，grenz zone，好酸球，核塵

要　旨

症例　67歳女性　初診のおよそ１カ月前から右外眼角に赤色の皮疹があった。皮疹は次第に増大し赤色局面を形成した。時期を同じくして右上眼瞼に赤色の結節を生じた。生検病理組織像で真皮内に好中球と好酸球を中心とした炎症細胞の浸潤があった。血管周囲に核塵を認めた。表皮直下と付属器周囲の炎症細胞浸潤は少なかった。臨床所見と組織像をあわせて顔面肉芽腫と診断した。ステロイドの局所注射が奏功し発疹は平坦化した。

はじめに

顔面肉芽腫は顔面にみられる周囲皮膚色より暗赤色の円形から卵型の形を示す斑，丘疹あるいは結節を示す皮膚疾患である。日光暴露が関与するとされるが原因不明である。病理組織学的に肉芽腫はみられず，白血球破砕血管炎の像を呈する[1)]。発疹は毛孔の開大を示し，経過は慢性的である[2)]。臨床所見からサルコイドーシス，慢性多型日光疹，皮膚エリテマトーデス，偽リンパ腫，リンパ腫，好酸球性膿疱性毛包炎，好酸球性血管リンパ増殖症，固定薬疹などが鑑別疾患にあがる。確定診断は組織診断によってなされる。治療はさまざまな方法の報告がある。今回われわれはステロイド局注で症状が軽快した顔面肉芽腫の１例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

Satoshi OFUJI et al.
1）雲南市立病院　皮膚科
2）出雲徳洲会病院　病理診断科
連絡先：〒699-1221 雲南市飯田96-1
雲南市立病院皮膚科

症　　例

患　者：67歳，女性

初　診：202X年２月

既往症：てんかん，複数の抗けいれん剤に対する薬疹

家族歴：特記事情なし

現病歴：202X年１月ごろより右外眼角に紅色皮疹があった。発疹は痛みも痒みもなかった。徐々に皮疹の部位は広がり隆起してきた。右上眼瞼にも皮疹は生じるようになった。

初診時所見：右上眼瞼におよそ２×１センチメートルの紅色結節があった。右外眼角から右頬にかけて長径がおよそ６センチの範囲で扁平に隆起する紅色斑があった。右頬では毛孔の開大があった（図１）。発疹の大部分は弾性硬であった。

病理組織検査：右頬の紅色斑を生検した。表皮に